

いかにあらむ日の時にかも声知らむ人の膝の上我が枕かむ

大伴旅人

『万葉集』巻第五・雑歌の一首。

天平元年(七二九)十月七日、大伴旅人は大宰府から都の藤原房前に梧桐の日本琴を贈った。次のような書簡を添えて。

この日本琴が夢の中で娘子となつて申しますに、「私は海上遥かな鳥の高嶺に根をおろし、幹を太陽の美しい光にさらしていました。常に雲や霧に包まれ、山川のくまぐまにさすらい、遠く風波を眺めながら、雁や木々と交わる生活をしていました。ただ心配なのは百年後むなくしく谷底で朽ち果てるのではないかとということでした。ところが、幸いにも立派な工匠に出逢い、切られて小さな琴になりました。音質が悪く音量が乏しいのも顧みず、常々「君子の左琴」(徳の高いお方のお側の琴)になりたい」と願つて次のように歌いました。



冒頭の歌はこの文書の後に置かれる。夢に現われた娘は琴の化身だという。旅人はその琴の娘に成り代わつて歌を詠んでいるのだ。「いつの日、どんな時に、声を知っている人の膝を枕にしましょうか」と。「声知らむ人」は教養のある文化人のことで、ここでは藤原房前を指す。「君子の左琴」も「声知らむ人」も中国古典に拠る言葉。

その娘は音質もそこそこ、音量もいまいちだけれど、素敵なひとの琴になりたいと日頃から夢見ていたという。琴の気持ち、わからなくはない。「人の膝の上我が枕かむ」は、膝の上に置いて弾く琴を想像すればいいのだろうが、夢の前段があるためほのかに男女関係をも匂わせる。いくら娘の設定とは言えど、旅人からこのような色っぽい空想短歌を贈られた房前はきつと驚いたにちがいない。しかし旅人の文学的遊び心に応じて、若干形式的ではあるものの、同じく中国古典に拠る言葉を用いて、短い返事と返歌を贈っている。

それにしても旅人はなぜ、房前にこんな手紙と琴を贈つたのだろうか。  
(小島なお)